志太の桐箪笥

●祖先は浅間神社の大工

藤枝で桐箪笥がさかんに作られるようになったのは、明治時代の頃といわれています。付近を流れる瀬戸川と大井川流域から良質の桐材を得られたことが大きな理由です。この桐材は、天保二年（一八三一）に藩主の本多氏が、藩財政改革のために、畑やたんぼ以外の空いている土地に有益な商品作物を植えることを奨励した結果、成長の早い桐の植えつけが盛んになって生まれたものです。

一方志太の職人のルーツは、浅間神社が造営された寛永十一年（一六三四）に全国各地から腕ききの大工たちが集められ、気候風土に魅せられて、静岡だけでなく藤枝にその後も住みついたのが始まりです。

豊富な材料と技術。そして地理的な便利さなどの条件がうまくかみあって、藤枝が桐箪笥の生産地となる下地がととのいました。

●三大桐箪笥産地のひとつ

明治時代に入り、徳川家が静岡に一大名として移されたおり、旧幕臣とともに、江戸の職人たちが藤枝にも移住し、地場産業となる基礎ができました。明治二十二年（一八八九）に東海道本線が開通すると、東京、名古屋までに販路を広げることができるようになりました。昭和に入ってからは、新潟の加茂、埼玉の春日部と並ぶ全国の三大桐箪笥産地としてその名声を広めるようになりました。

藤枝の桐箪笥の系譜は、明治初期から大きく石神系と伊東系に分けられます。そして、この両者から橋本系と広住系が生まれ、技術技法の継承は、四つの系譜がありましたが、石神系は残念ながらなくなり、現在は三つの系譜が残っています。

戦前までの全盛期には五十名以上もの職人がいましたが、昭和三十年代中頃から流行した洋服箪笥に市場を奪われ、桐箪笥の注文がどんどん減り始めました。それにつれ、職人たちもほとんどが洋家具の仕事に変わってしまったのです。

藤枝桐箪笥が、衣装箪笥として作られるようになったのは、明治時代初期の頃です。そこから現在に至るまでの歴史は、特徴の違いから大きく次のように分けられます。

明治二十年代～明治四十年代

・前桐と三方桐（前、両脇が桐で、背が杉）のものがあります。
・うるし塗装、素木肌の両方があります。
・金具に家紋の模様がついています。
・下段に小開きがあり、中は二杯の小抽斗です。

明治四十年代～大正初期

・二枚の引戸と小抽斗の上置きが最上段につくようになりました。
・うるし塗装が少なくなり、ヤシャ塗りが始まりました。

明治初期～明治二十年代

・前面が桐を使用したもので、底板や裏板には杉材が使われていました。
・うるし塗装がほとんどです。
・上段は開き扉付、下段は大抽斗二杯です。

大正初期～大正末期

・大開きの扉の中が、抽斗ではなく、盆になります。服装の洋風化が始まりましたが、洋服箪笥が高いため、この形が考案されました。その後洋服箪笥が普及すると、盆は和服用に定着。藤枝では大正十年代にとりいれられました。
・引手金具から引手の部分を彫り込んだ箱引手になりました。

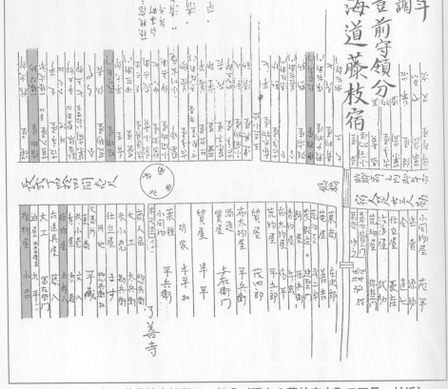
大正末期～昭和四十年代

・大正十五年国産博覧会に、三代目石神重兵衛さんが桐箪笥を出品、一等賞を受賞。
・金具の素材が鉄から銅へと変わりました。
・昭和十年頃より納の数が三枚から五枚、七枚になり、補強金具がなくなりました。
・昭和三十年頃からおしのりに変わってボンドを使うようになりました。

昭和四十年代～現在

・昭和四十年頃には、洋服箪笥の製造が主流となり、桐箪笥の職人が激減しました。
・昭和四十五年頃から少しずつ、桐箪笥の良さが再確認され、注文も増えてきました。
・昭和五十五年静岡県郷土工芸品として指定を受けました。
・平成五年現在、職人数は八名。常時生産できる店はわずかに二軒となりました。

このように、今、藤枝の町には桐箪笥を作る職人はわずか八名になってしまいました。今後後継者の問題も含め、伝統技術をどう守っていくかが大きな課題です。



天保十三年　東海道藤枝宿絵図の一部分（現在の藤枝市本町二丁目　付近）
指物屋、建具屋、大工などが随所に見られる